# 第１章　2008年度京都大学構内遺跡調査の概要

上原真人　　清水芳裕　　冨井　眞

## １　調査の経過

京都大学文化財総合研究センターは，吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し，予定地の埋蔵文化財調査を，既知の遺跡との関係や過去の調査結果により，発掘・試掘・立合にわけて実施している。2008年度には，以下のように発掘調査２件，立合調査５件を実施した（括弧内は図版１および表１の調査地点番号）。

| | | |
|---|---|---|
| 発掘調査 | 西部構内課外活動施設新営（西部構内ＡW20区） | （整理中，図版１－348） |
| | 病院構内ｉＰＳ細胞研究施設新営（病院構内ＡＧ13区） | （第２章，図版１－349） |
| 立合調査 | 北部総合研究棟（農学部総合館）改修その他工事（北部構内ＢＥ33区） | （第１章，図版１－350） |
| | 附属病院積貞棟建設に伴う電気設備工事　（病院構内ＡＨ14区） | （第１章，図版１－351） |
| | 西部総合研究棟等改修その他工事（西部構内ＡＵ20区） | （第１章，図版１－352） |
| | フィールド科学教育研究センター研究棟新営工事（北部構内ＢＧ33区） | （第１章，図版１－353） |
| | 本部構内ガス配管改修工事（本部構内ＡＹ30区） | （第１章，図版１－354） |

## ２　調査の成果

前節で掲げた発掘調査のうち，整理を終えたものについて，その成果を略述する。なお，病院構内ＡＧ13区は，第２章において調査成果を詳述しているので参照されたい。

**病院構内ＡＧ13区**　　本調査区は，病院東構内のおよそ中央に位置している。遺跡の基盤を構成する砂礫層は厚さ２ｍ以上に達するが，その中に含まれる土器破片の年代的検討から，調査区一帯は，13世紀頃までは鴨川（高野川系の流路）の氾濫原で，その後に徐々に河原が西へ移動していき，16世紀頃から安定した環境になっていたことがわかった。それに連動するようにして，この辺りの開発は，17世紀頃から活発になる。調査区西辺では，砂礫層の最上部に中世の遺物の細片を含みつつもわずかに江戸時代の陶磁器類が出土している部分が認められるが，安定して広がるわけではない。調査区全体に広がる遺物包含層は２枚である。下位の包含層は淡褐色土で，出土遺物は17世紀～18世紀前半におさまる。砂礫層群の上面では，この淡褐色土を埋土とする井戸や鋤溝や小ピットなどの遺構が確認

される。上位の包含層はさらに土壌化が進んだ黒灰色土で，遺構も数多くなるとともに，切り合い関係になる遺構も多数認められる。この包含層の年代は，18世紀後半以降19世紀にかけてであり，この時には農地としての開発が本格化していたことがうかがえる。なお，250m東の338地点で確認された18世紀の土石流は，この地点では確認されていないものの，年代的にはおよそ対応する性格不明の黄白色粗砂層が部分的に分布している。

**京都大学構内における立合調査**　北部構内ＢＥ33区では，現地表下約６ｍの標高58.5ｍ付近で，北北東から南南西にはしる厚さ１ｍ以上の砂礫層が確認された。５㎜程度の粗砂を基質として拳大から人頭大の花崗岩の角礫が主体となるので，白川系の流路と思われるが，頁岩も散見できる。この砂礫層は，東に広がる黄白色粘土層を切っているが，その粘土層をえぐった斜面堆積の部分には，流路が削っていった後にしばらく水が引いて植物が茂っていたことを示唆するように，暗褐色の粘質土が散在するのを確認できた。どの地層からも遺物を確認できなかったので，これらの堆積層については，先史時代ということ以上には年代を特定できない。南接する125地点の中央南辺では，同程度の標高で，南に広がる土壌化層が北を流れる流路にえぐられていることが確認されているので，先史時代に大きな出水があったことがうかがえる。

西部構内ＡＵ20区の立合調査では，現地表下約1.2mに，厚さ30㎝程度の近世の遺物包含層である黒灰色土があり，さらにその下位に中世末期頃の可能性のある黄灰色土が堆積していたのを確認している。現在整理中の，北方の348地点でも同様の層序が確認されており，この一帯にも中近世の遺跡が広がっていることがうかがえる。

病院構内ＡＨ14区の立合調査では，現地表下約1.5～2.0mで，やや明るい褐色を呈する近世の遺物包含層を確認した。周辺で確認される，中近世の遺物包含層である灰褐色土や茶褐色土とは異なる層相だが，この下位には砂礫層が堆積しているので，ＡＧ13区とは異なった土地利用がおこなわれていたのかもしれない。